

○57句「長沙沙卑濕」の故事について

この句では文帝に仕えていた賈誼が長沙王の太傅に左遷させられた次のような故事を響かせている。（『史記』「屈原・賈生列伝二十四」の本文口語訳を要約引用したものを以下に記してみる。）

屈原が汨羅に身をしずめたのち百年あまりして、漢の賈生があった。長沙王の太傅（もり役）となって、湘水の川を渡り、書いたものを投げ入れて屈原を弔った。この賈生の名は誼。洛陽の人である。年十八でよく『詩経』『書経』を読誦し、文章をよく綴り、郡中の評判者であった。河南郡の太守呉公が、彼の優れた才能のあるのを聞いて、門下の食客としておいた。呉公が廷尉に任ぜられたので、天子である文帝に彼を推した。そこで文帝は召しだして博士の役とした。その後、文帝は賈誼の才を認め、公卿の位に適した人物であるとお思いになるようになった。ところが、絳侯周勃や灌嬰らの旧臣は、彼を妬み、彼を忌みそしめた。そこで帝もそれに動かされ、彼を疎んじ、彼のいうことをとり上げられず、長沙王の太傅に落とされた。

▼そしてこれに続く『史記』の次の一文および、後述の『文選』の一文が、この五十七句の詩語の措辞となっていると思われる。